



TITLE:

日本一のクラゲ天国田辺湾(42) イ
チメガサクラゲ

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(42) イチメガサクラゲ. 紀伊民報
2011

ISSUE DATE:

2011-11-17

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180175>

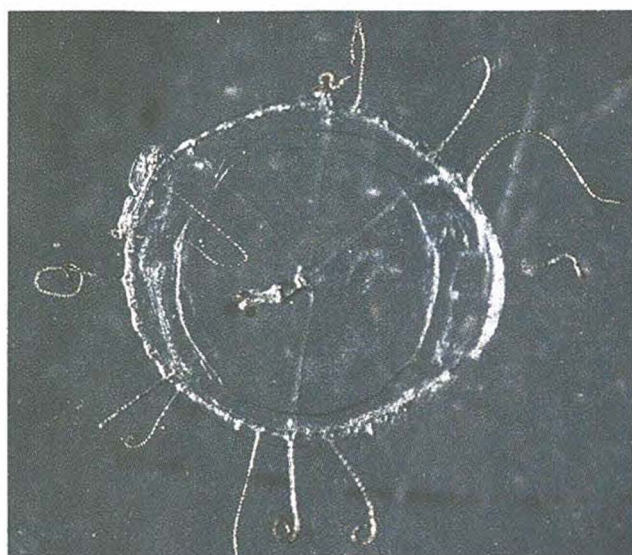
RIGHT:

© 紀伊民報社

紀伊民報

2011年(平成23年)11月17日 木曜日 第20747号 (12)

イチメガサクラゲ



△
大人になりかけのイチメガサクラゲ (河村真理子さん撮影)

久保田 信

42



このクラゲはイチメガサクラゲだ。成長すると、昔の女性がかぶったという風流な市女笠(いちめがさ)の形になるが、この個体はまだ未成熟

なので、傘のてっぺんは、ほんのちよっとだけしか突き出していない。直径も約4ミリと小さいが、8ミリほどまで成長する。
本州以南に普通の種類であるが、大きく育った個体は田辺湾でまだ採れたことがない。

イチメガサクラゲのかさの骨にあたる放射水管は8本ある。通常のクラゲが4本なのに、倍あることになる。放射水管は、人間でいえば血管のようなもので、倍あったほうがより潤滑に、より早く、きめ細かく体の隅々まで栄養分を行き渡らせること

となる。

傘の縁には感覚器が規則正しく配置されており、その数は放射水管の2倍である。これで体のバランスなどを取っているわけだ。餌を捕る触手も16あるので、感覚器の数と同じだ。両者は交互に配置されている。画像の個体は採集のため、触手のいくつかは傷んでいる。傘も少し縮んでしまった。

触手の付け根に膨らみがないのが、このクラゲの仲間の特徴である。こういった形態のクラゲはポリプ世代がなく、受精卵から直接にクラゲが成長する。いわば、われわれと同じような成長方法を取る。この個体は、11時の方向にある放射水管の傘縁付近に、丸い小さな生殖巣ができているので、やや大人になりかけているのだらう。

このようなクラゲは外洋性なので概して飼育が難しく、実験室では長く生きない。生活史も、詳しくは突き止められていないクラゲである。

(京都大学准教授)